

## 小野ゼミ愛

第5期生 河野 智晃

初めてのケース（コンビニエンスストア：成熟市場における持続的成長の可能性）の中間発表の際に、ゼミに来訪して下さったOB・OGの方々の人数の多さに驚いた。お仕事等で忙しい中、後輩に会いにこんなにも人が集まるなんて。その理由も、小野ゼミでの生活を通して、わかってきた。それは各代を跨ぎ、脈々と続く「小野ゼミ愛」があるからなのだ。

OB・OGの方々の「小野ゼミ愛」を感じる機会はたくさんあった。ゼミの導入期は、よく現役時代の話をして下さった。この頃俺は、様々なOB・OGの方の話を聞かせていただく度に、俺の代で小野ゼミの伝統を途絶えさせてはいけないという使命感に似たものを感じた。また、普段のゼミ活動においては、HPに残された先輩方の質の高いケースの資料や論文を拝見する度に、モチベーションが上がった。現役の頃の先輩方の苦労を想像しては、先輩方に少しでも追いつこうとゼミ活動に打ち込んだ。今でも、合宿・飲み会・三田祭と、多くのOB・OGの方がゼミを訪問してくださる度に、頭の下がる思いである。

そんな愛情を受けながら2年間を過ごしてきた俺も「小野ゼミ愛」を確実に深めてきた。何かに情熱をもって打ち込み、ハマることの面白さを求めていた俺は、三田での大学生活はどっぷり小野ゼミだった。「小野ゼミ愛」を育むのは、どっぷり小野ゼミから得られる共有体験の多さなのだろう。勉強面においては、徹夜続きの鬼のコトラーから始まり、妥協を許さないディスカッションが繰り返されるケース・ディベート、苦悩しながら日本語の壁にぶつかる論文と、大変だったことが多々あった。しかし、辛い時も辛い時も共に活動するみんながいるから乗り越えられた。生活面においても、寝食を共にした経験は数えきれない。ケースが終わった後の飲み会（時にはケース中も?!）や合宿や旅行、同期の家に泊まることも多かった。勉強面での疲れを取るかの如く、はっちゃけた。このOFFの時間があるからこそ、また一丸となってゼミ活動に取り組めたのだろう。小野ゼミには他のゼミとは比較にならないほど、同期や後輩との共有経験がある。そんな経験が俺の「小野ゼミ愛」を深くし、いつしか俺も確実に「小野ゼミ愛」ホルダーとなった。

三田での生活の代名詞であった、小野ゼミでの2年間がもうすぐ終わろうとしている。かけがえのない仲間との活動が終わることを思うと、すごくセンチメンタルな気分になる。でも、思った。来年からOB・OG側へとまわるだけなのだ。また我々5期生も「小野ゼミ愛」のもと集まり、酒を酌み交わすのであろう。今後も6期、7期と「小野ゼミ愛」が受け継がれることによって、充実したゼミ生活を送ったと胸を張れる卒業生が増えることを、これからOBになる者として願っている。

最後に末筆にはなるが、この「小野ゼミ愛」は「先生のゼミ生への愛」あってこそのものであろう。論文の添削や活動の相談など、いやな顔一つせずに、常に情熱をかたむけてくださったことに感謝したい。